

大学生における進路選択セルフ・エフィカシーに 影響を及ぼす要因

—フォーカスグループインタビューを用いた予備的検討—

Factors Affecting Career Decision Making Self-efficacy
Among Undergraduates

—A Preliminary Study Using Focus Group Interview—

前場 康介

跡見学園女子大学 心理学部

臨床心理学科 専任講師

Department of Clinical Psychology, Faculty of Psychology,

Atomi University

Senior lecturer, MAEBA Kousuke

要 約

本研究では、4年制大学の教育学部に所属する大学4年生8名を対象に、進路選択セルフ・エフィカシーの向上を目的とした介入プログラム開発のフォーマティブ・リサーチとして、フォーカスグループインタビューにより大学生の進路選択SEへ影響を及ぼす要因を収集することを主な目的とした。インタビューの結果をSEの4つの主要な情報源に基づき生理したところ、「遂行行動の達成」ではSEの向上要因として【事前知識や類似体験の獲得】、低下要因として【想定した見通しとの差異】、【現実的な困難の経験】が抽出された。「代理的体験」については、SEの向上要因として【肯定的なモデルの存在】、【想像的希望】が抽出された。低下要因は特にコーディングされる内容は挙がらなかった。「言語的説得」では、SEの向上要因として【可能性への言及】、【反骨精神】、低下要因として【現実的な困難の指摘】が抽出された。最後に、「生理的・情動的喚起」については、SEの向上要因として【関連行動に付随する肯定的感情】、低下要因として【当該職業への違和感】、【ストレスによる体調不良】、【関連行動に付随する不快感情】が抽出された。最後に、それぞれの結果を鑑み総合的な考察を行った。

【Key Words】

大学生、進路選択セルフ・エフィカシー、フォーマティブ・リサーチ、フォーカスグループインタビュー

I はじめに

「職業とは自己のパーソナリティ表現の1つである (Holland, 1997)」と形容され

るほど、進路選択は個人のアイデンティティの達成における最後の課題ともいえるべき重要な決定となり得る。一方で、極めて多

様な職種や働き方が存在する現代社会において、大学生が自身の進路を選択することは決して容易なことではない。

進路選択を困難にする要因には様々なものが想定されているが、その1つに「自信の低下」が挙げられる。キャリア心理学の文脈においては、このことは進路選択セルフ・エフィカシー (self-efficacy; 以下、SE とする) として古くから扱われてきた (i. e. Hackett & Betz, 1981; Foltz & Luzzo, 1998; Betz, 2001)。また、SEを高めるためには4つの主要な情報源を操作する必要があるとされ (Bandura, 1977; 1997)、この情報源に基づく介入研究がキャリア心理学の分野においても行われている (Betz & Schifano, 2000; Schaub & Tokar, 2005; 佐藤, 2013)。

これら4つの情報源とは、①遂行行動の達成 (mastery experiences)、②代理的体験 (vicarious experiences)、③言語的説得 (verbal persuasion)、および④生理的・情動的喚起 (physiological & affective states)、である。

「遂行行動の達成」とは、当該行動において個人がこれまでに有する実際の成功もしくは失敗体験を指し、このような体験は遂行の程度についての情報を直接的に付与するため、SEに最も強い影響を及ぼすと仮定されている。「代理的体験」とは、当該行動を他者が行っている場面を観察することであり、そのモデルは年齢や性別、当該能力などが類似している方がより影響力が強いとされる。「言語的説得」とは、当該行動に関する情報や説得を、他者から言語的に得ることである。この情報源は単一で用いられるとその効果は相対的に弱いと

されるが、他の情報源と組み合わせて用いられることで効果が大きくなる。最後に、「生理的・情動的喚起」とは、当該行動に付随して生じる身体的・精神的変化を指す。例えばストレスや痛み、楽しさ、不安、快感などであり、これらの状態を知覚することでSEに影響を生じる。前述の通り、情報源を操作することにより進路選択SEを向上させる試みがなされているが、その結果は一致をみるには至っていない。この要因のひとつとして、介入内容が必ずしも対象者の現実に即したものとなっていないことが考えられる。

より効果的なプログラムを開発するために、実際の対象集団から必要な情報を事前に収集する試みはフォーマティブ・リサーチと呼ばれる (島崎ら, 2012)。Bauman et al. (2006) によれば、フォーマティブ・リサーチの意義は次の3点にあるとされる。すなわち、①介入目的を明確にすること、②介入目的を果たすための介入方略の開発過程を把握すること、および③対象者のニーズや状態を把握することでプログラムとの関連性を高め説得力を向上させること、である。

さらにBauman & Chau (2009) は、フォーマティブ・リサーチの有効な質的調査方法の1つとしてフォーカスグループインタビュー (focus group interview; 以下、FGIとする) を挙げている。FGIは、仮説生成を行うことや、参加者もしくはそれを代表とする特定集団の態度や考え方の方向性を見出すことなどを目的として広く用いられている方法である (藤内, 2001)。FGIではローデータをそのまま活用することが可能であり、個別インタビューでは収集し

えないより深く豊かな内容を把握することができるといふ特徴を有している（安梅ら、2003）。

筆者の知る限り、大学生の進路選択SEに焦点を当て、その影響要因を詳細に分析した研究は未だ少ない。そこで本研究では、大学生における進路選択SEの向上を目的とした介入プログラム開発のフォーマティブ・リサーチとして、FGIを用いて大学生の進路選択SEへ影響を及ぼす要因を収集することを主な目的とした。

II 方法

1) 調査対象および手続き

2018年11月、関東の4年制大学の教育学部に所属する4年生8名を対象としてFGIを行った。リクルートの方法としては、まず当該学生が所属する研究室の担当教員に、本研究の概要および目的を記した文面を添え、口頭にて参加募集を依頼した。次に、同意が得られた8名の大学生に対して、インタビュー開始前に改めて文面を添えて本研究の詳細について説明し、文書による同意を得た。

インタビューの実施はヴォーンら（1999）の手法に従って行い、グループファシリテーターとして豊富な経験を有する臨床心理士が司会を担当した。発言内容はICレコーダーを用いて記録し、所要時間は概ね50分であった。

2) 質問項目

FGIにおけるリサーチクエスションは、主として次の通りであった。すなわち、①進路選択や就職活動への自信が高まった、あるいは下がった要因にはどのようなものがあったか、②進路選択や就職活動への自

信に影響を与えた他者からのメッセージの内容にはどのようなものがあったか、および③どのようなメッセージがあれば、進路選択や就職活動への自信の向上あるいは低下につながると思うか、である。

3) 倫理的配慮

先述の通り、対象者には文面を添えて本研究についての詳細および倫理的事項について説明し、文書による同意を得た。倫理的事項の具体的内容として、同意は完全に任意であり対象者はこれを自由に拒否できること、研究への不参加が成績評価等の不利益には何ら結びつかないこと、研究参加を中止したい場合はいつでも参加を中断することが可能であること、を説明した。本研究により得られた同意書およびデータは、IDを割り付けたうえで連結可能な状態にて匿名化し、施錠可能な場所で厳重に管理した。なお、本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会に諮り、承認を受けたうえで実施した。

4) 分析方法

インタビューより得られたデータの分析は、松本ら（2004）による方法をもとに行った。まず、ICレコーダーに録音された発話内容を文字化し、逐語による発話記録を作成した。次に、発言の内容を適切な長さ断面化し（フラグメント化）、発言の文脈に沿った意味が理解できるよう最小限の言葉を補足した（エディティング）。そして、類似する内容をカテゴリ化し、テーマをつける作業を行った（コーディング）。

III 結果

FGIより得られた結果の概要を表1に示

す。なお、コーディングを行った内容がいずれの情報源に当てはまるかについては、Zinken et al. (2008) による情報源の補完モデルに準じて判別した。このモデルでは、情報源のタイプを自己 (self) —他者 (other)、および実行 (action) —評価 (appraisal) の二軸に基づき分類を行うものであり、概念的混同が生じやすい情報源間の弁別に極めて重要な知見をもたらすものである。

分析の結果、「遂行行動の達成」ではSEの向上要因として【事前知識や類似体験の獲得】、低下要因として【想定した見通しとの差異】、【現実的な困難の経験】が抽出

された。「代理的体験」については、SEの向上要因として【肯定的なモデルの存在】、【想像的希望】が抽出された。低下要因は特にコーディングされる内容は挙がらなかった。「言語的説得」では、SEの向上要因として【可能性への言及】、【反骨精神】、低下要因として【現実的な困難の指摘】が抽出された。最後に、「生理的・情動的喚起」については、SEの向上要因として【関連行動に付随する肯定的感情】、低下要因として【当該職業への違和感】、【ストレスによる体調不良】、【関連行動に付随する不快感情】が抽出された。

表1 FGIにより抽出された発話内容の一覧

情報源のタイプ	SEの向上/低下要因	コード	発話内容の例
遂行行動の達成	向上要因	事前知識や類似体験の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・大学で学ぶ以前に当該知識を事前に学んでいた ・教育実習が教員を目指す良い機会となった ・しっかり勉強すれば合格することが分かった
	低下要因	想定した見通しとの差異 現実的な困難の経験	<ul style="list-style-type: none"> ・当該学問を学んでいくうちに齟齬を感じた ・実際には収束的に困難と感じた ・ある職業になるための勉強が厳しいと分かった ・筆記試験に落ち続けてしまった ・目指した職業の職務が多すぎて困難と感じた
代理的体験	向上要因	肯定的なモデルの存在 想像的希望	<ul style="list-style-type: none"> ・目指している職業に親が就いていた ・高校の教員で魅力的な人がいた ・高校の司書がとても面白い人だった ・小さい子どもが周りに多くいた ・何をしたいかと考えたら当該職業しか浮かばなかった
	低下要因		(該当なし)
言語的説得	向上要因	可能性への言及 反骨精神	<ul style="list-style-type: none"> ・筆記さえ通れば人柄的にも適していると言われた ・教員にとっても向いていると周囲から良く言われていた ・無理だと言われたら逆に動機づけが高まった
	低下要因	現実的な困難の指摘	<ul style="list-style-type: none"> ・嘘をつけないから営業などの仕事は無理だと言われた ・当該職業の専任にはなれないと言われた ・周囲の人から「あなたには無理」と言われた ・希望する学問領域の教員から可能性を否定された ・メディア等で当該職業の厳しさを知った
生理的・情動的喚起	向上要因	関連行動に付随する肯定的感情	<ul style="list-style-type: none"> ・本を読むことがとても好きだった ・委員としての活動がとても楽しかった ・サッカーが好きで、顧問になりたいと思った ・小さい子どもの相手をするのが楽しかった ・当該職業についてワクワクする気持ちがあった
	低下要因	当該職業への違和感 ストレスによる体調不良 関連行動に付随する不快感情	<ul style="list-style-type: none"> ・最終面接まで進んだ時に「違うな」という感覚があった ・失敗が続いて体調不良のような状態が長くあった ・人前で話すことが苦痛であった

IV 考察

本研究では、大学生における進路選択SEへ影響を及ぼす要因を収集することを目的として、教育学部に所属する大学4年生を対象にFGIを用いて質的に検討を行った。FGIにて得られた発話およびそれに基づくコーディングから、概ね想定した4つの情報源に分類される内容が抽出された。

まず、「遂行行動の達成」では、「大学で学ぶ以前に当該知識を事前に学んでいた」もしくは「しっかり勉強すれば合格することが分かった」など、予め希望する進路に向けて入念な準備を整えることが個人のSEを高めることが考えられた。また事前の準備はなくとも、教育実習のように希望する職業の類似体験が肯定的な作用を及ぼすことも示唆された。しかしながら、このような体験は個人の主観的な認知に依拠する側面が強く、例えば「人前で話すことが苦痛であった」という、体験に伴う否定的な感覚がSEを低下する要因となることも示された。一方、「当該学問を学んでいくうちに齟齬を感じた」ことや、「目指していた職業の職務が多すぎて困難と感じた」ことなど、当初の想定とは異なる否定的な側面の認知、あるいは「筆記試験に落ち続けてしまった」などの現実的な困難に直面することはSEの低下に結びつくことも明らかになった。このような失敗とも呼べる体験は進路選択において避けられないものであり、たとえ小さなことでもそのプロセスにおいて成功と感じられる体験を見出し、それを積み重ねていくことが当該情報源を活用するために重要となる。

「代理的体験」については、各対象者が進路選択の際に参照した肯定的なモデルを

多く挙げていた。具体的なモデルには主として両親や教員、すなわち尊敬できる対象が挙げられており、このようなモデルはSEの情報源としてより効果的であることが指摘されている (Usher & Pajares, 2008)。また、「何をしたいかと考えたら当該職業しか浮かばなかった」という発言に代表されるように、自身の中で好ましく感じられる職業イメージを有しておくこともSEを高める際には重要な手がかりとなることが示唆された。イメージの使用 (imagery use) は特に運動領域におけるSEの向上に用いられることが多いが (Hausenblas et al., 1999; Wesch et al., 2006)、進路選択SEの向上にも同様の効果が期待される場所である。

「言語的説得」では、多くの参加者が周囲の人から現実的な困難さに係る否定的な発言をされたことを述べていた。浦上 (1993) によれば、大学生の進路選択過程は、受験や就職活動など実際の体験を得る機会が限られており、そのため遂行行動の達成として機能するような経験自体をほとんどの個人が有していないとされる。この点について前場 (2018) は、進路選択SEは特に他者からの情報源の影響がより重要な意味を持つことを指摘しており、本研究でもその傾向が認められたものと考えられる。また、本研究において特徴的であったのは、他者からの否定的な発言が必ずしも個人のSEを低下させるとは限らず、そのような言語刺激がかえって本人の「反骨精神」を昂め、SEや実際の行動を促進する機能を果たす可能性がある点である。このように、同様の言語刺激であっても個人の認知によってその機能は異なることが示唆

され、こうした発言をSEのリソースとして再評価するような機会が重要となるかもしれない。

最後に、「生理的・情動的喚起」では、個人のこれまでの経験において、進路選択に関連する行動に伴う肯定的な感情がSEを高めることが示唆された。一方で、「失敗が続いて体調不良のような状態が長くあった」、「人前で話すことが苦痛であった」など、関連行動に伴う不快な状態を経験することで、当該SEが大きく下がってしまうことも示された。本研究から得られた結果に基づけば、肯定的な感情の生起はより早期の段階における進路選択SEを促進する作用を持ち、反対に不快状態についてはより後期の段階、すなわち実際の進路決定を下す段階においてより強く作用することが考えられた。このことから、個人の進路選択SEを効果的に高めるには、早期から自身の進路選択に関連する肯定的な体験を積極的に積むことができるような教育や環境調整を行い、より後期には現実的な困難に対処するための否定的感情の低減方略を獲得することなどが重要になると思われる。

最後に、本研究における限界について述べる。本研究では教育学部に所属する4年生を対象として研究を行ったが、他の専攻や学年によって抽出される内容は異なることが推測される。そのため、今後はより多様な大学生を対象として、進路選択SEの情報源の内容の異同を詳細に検討することが望まれる。

付記

本研究は科学研究費補助金（若手研究代

表：前場康介）研究課題「大学生の進路選択セルフ・エフィカシー情報源尺度の作成と新たな介入プログラムの開発（課題番号：18K13301）」の一部である。

引用文献

- 安梅勅江・片倉直子・佐藤泉・瀧田英津子・西田麻子・大中敬子（2003）. フォーカスグループインタビュー活用の意義—「健康日本21」への住民の声の反映に向けて—. 日本保健福祉学会誌, 9, 45-54.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: the exercise of control*. New York, Freeman & Company.
- Bauman, A. & Chau, j. (2009). The role of media in promoting physical activity. *Journal of Physical Activity and Health*, 6, 196-210.
- Bauman, A., Smith, B. J., Maibach, E. W., & RegerNash, B. (2006). Evaluation of mass media campaigns for physical activity. *Evaluation and Program Planning*, 29, 312-322.
- Betz, N. E. (2001). Career self-efficacy. In: Frederick, T. L. Leong., & Barak, A. (Eds.) *Contemporary models in vocational psychology: a volume in honor of Samuel H. Osipow*. New Jersey, Lawrence Erlbaum Associates.
- Betz, N. E. & Schifano, R. (2000). Evaluation of an intervention to increase Re-

- alistic self-efficacy in college women. *Journal of Vocational Behavior*, 56, 35-52.
- Foltz, B. & Luzzo, D. (1998). Increasing the career decision making self-efficacy of nontraditional college students. *Journal of College Counseling*, 1, 35-44.
- 藤内修二 (2001). 地域把握のためのフォーカス・グループ・インタビューの利用. *保健の科学*, 43, 204-209.
- Hackett, G. & Betz, N. E. (1981). A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-336.
- Hausenblas, H. A., Hall C. R., Rodgers, W. M., & Munroe, K. J. (1999). Exercise imagery: Its nature and measurement. *Journal of Applied Sport Psychology*, 11, 171-180.
- Holland, J. L. (1997). *Making Vocational Choices: A Theory of Vocational Personalities and Work Environments*. 3rd Edition, Psychological Assessment Resources, Odessa.
- Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- 前場康介 (2018). 大学生の進路選択セルフ・エフィカシーにおける強化要因についての概観. *跡見学園女子大学文学部紀要*, 53, A89-A99.
- 松本裕史・村中亜弥・西村志穂・竹中晃二 (2004). 運動実践者の継続意欲を高める運動指導について-フォーカスグループを用いた質的調査から-. *スポーツ産業学研究*, 14, 47-53.
- 佐藤 舞 (2013). 進路選択過程に対する自己効力と就職活動における情報源との関連. *応用心理学研究*, 38, 251-262.
- Schaub, M. & Tokar, D. (2005). The role of personality and learning experiences in social cognitive career theory. *Journal of Vocational Behavior*, 66, 304-325.
- 島崎崇史・前場康介・斎藤めぐみ・飯尾美沙・細井俊希・竹中晃二・吉川政夫 (2012). フォーマティブリサーチによる介入方略の開発-身体活動実施を支援する介入方略の開発に関する実践研究-. *健康心理学研究*, 25, 49-59.
- Usher, E.L. & Pajares, F. (2008). Sources of self-efficacy in school: critical review of the literature and future directions. *Review of Educational Research*, 78, 751-796.
- 浦上昌則 (1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. *教育心理学研究*, 41, 358-364.
- ヴォーン, S.・シナグブ, J.・シューム, J. S. (1999). グループインタビューの技法. 慶應義塾大学出版会, 東京.
- Wesch, N. N., Milne, M. I., Burke, S. M., & Hall, C. R. (2006). Self-efficacy and imagery use in older adults exercisers. *European Journal of Sports Medicine*, 6, 197-203.
- Zinken, K.M., Cradock, S., & Skinner, T.C.

(2008). Analysis System for Self-Efficacy Training (ASSET) Assessing treatment fidelity of self-management in-

terventions. *Patient Education and Counseling*, 72, 186–193.